

2020年 4月 30日

日本災害復興学会 2018年度研究会
活動実績報告書

<研究会名称>

関西災害アーカイブ研究会

代表者	高森 順子
企画分担者	矢守 克也
	山中 茂樹
	林 勲男
	阪本 真由美
	石原 凌河
	磯村 和樹

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

【課題、目的】 この研究活動を行った動機や目的を記入してください。
(1) 災害多発時代における「災害アーカイブ」の研究知見の共有・深化 (2) 「災害アーカイブ」の研究知見をもとにした新たな実践創造
(1) 災害多発時代における「災害アーカイブ」の研究知見の共有・深化 災害が頻発するなかで、災害の記録を後世に伝える活動全般を指す「災害アーカイブ」の実践が蓄積されてきた。しかしその一方で、「災害アーカイブ」に関わる学問領域は、記録の保存・活用に関わる研究領域として歴史研究、史料研究、記憶研究、そして、その実践の特性に応じてアーカイブズ学、教育学、社会心理学、情報工学、哲学なども関わりが深い。このような分野横断的なテーマである「災害アーカイブ」は、各学問分野において縦割りに研究知見が積み重ねられていることが多く、それらを総合的に検討することは行われてこなかった。 そこで、「災害アーカイブ」をめぐる実践・研究を行っている研究者を分野を問わずに集め、新旧の実践を検討する場として本研究会を発足することとした。これにより、「災害アーカイブ」に関連する研究・学問領域を、実践との関係性を含めてマッピングし、「災害アーカイブ」学としての基礎をつくることを目指す。
(2) 「災害アーカイブ」の研究知見をもとにした新たな実践創造 (1)を踏まえた上で、新たな「災害アーカイブ」の実践を創造することにより、研究知見を社会に還元することを目指す。具体的には、研究会メンバーが目下取り組んでいる実践をより発展させる、ないしは、研究会がコンサルティングする形で、課題のある「災害アーカイブ」の実践に対して提言をするという形をとる。



【実施方法、内容】 この研究活動の実施方法、内容を記入してください。
(1) 定期的な研究会の実施 (2) 研究知見のフィードバックとしての企画展の実施 (3) 研究知見のフィードバックとしての日本災害復興学会分科会実施
(1) 定期的な研究会の実施 3ヶ月に一度を目安として、大阪にて研究会を実施する。研究会では、各メンバーの「災害アーカイブ」に関わる知見・実践の報告をベースとして、議論を進めていく。
(2) 研究知見のフィードバックとしての企画展の実施 (1)で行われる研究会での議論を蓄積をもとにして、新たな実践も行う。具体的には活動成果にて記述する。
(3) 研究知見のフィードバックとしての日本災害復興学会分科会実施 (1)研究会、および(2)企画展の実施を踏まえた上で、日本災害復興学会にて分科会を実施する。



<p>【活動成果】 この研究活動で得られた成果を記入してください。</p> <p>(1) 定例研究会 (2) 企画展「仮留（かす）める、仮想（かさ）ねる」の実施 (3) 日本災害復興学会分科会</p> <hr/> <p>(1) 定例研究会 定例研究会は2018年7月13日、2019年7月7日、2019年11月23日に行った。研究会では、2017年度の研究会の成果としての災害復興学会学術誌「復興」にて掲載された論文「災害アーカイブとはなにか」をベースとして、新旧の「災害アーカイブ」の実践と考察を進めていった。</p> <p>(2) 企画展「仮留（かす）める、仮想（かさ）ねる」の実施 研究会での議論を踏まえた上で、2019年2月23日・24日、関西災害アーカイブ研究会は、同研究会に参加する岡部美香（大阪大学）、溝口佑爾（関西大学）、高森順子（愛知淑徳大学）を中心として「仮留（かす）める、仮想（かさ）ねるー津波に流された写真の行方」と題した企画展を大阪万博記念公園・エキスポシティにて行なった。</p> <p>本企画は、①パネルおよび写真の展示を通して、東日本大震災の後、東北地方沿岸部で自然発生的に群発した被災写真洗浄・返却活動（以下、「被災写真救済活動」）のこれまでの経緯と現況を紹介するとともに、①の展示と②トークイベントおよび③公開研究会を通して、震災をはじめとする災害の記憶を後世に遺し、継承していくことの意義と課題について考える機会を人々に広く提供するものであった。</p> <p>(3) 日本災害復興学会分科会 (2)の企画展のあり方、および、災害復興に関する研究者・実践者の世代間における継承の現状と課題について共有することを目的として、分科会「災害復興研究はいかに読まれるかー災害復興学会に関わる論文レビューと災害アーカイブ実践報告の相互参照から考えるー」を実施した。ここでは、日本災害復興学会でこれまで発表されてきた論文や報告等のレビューを行い、これまでどのような研究・実践が積み重ねられてきたのかを概観する。さらに、今現在行われている実践は、どのような研究や実践を参照して行われているのかを、災害アーカイブに関連する事例から報告することを通じて検討した。</p>

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。

(例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等)

<p>(1) 研究活動の社会的意義 本研究会は、新たな実践を創造するという目的がある。今回は、写真展という実践を行った。展示はショッピングモールという不特定多数の人々が訪れる場所で行われた。ショッピングモールには、本展示を目的としている人ばかりが立ち寄るわけではない。そうした空間に、過去の災害と、はからずもそこに関わらざるをえなかった人々に思いを馳せる場を作ることは、災害の記憶と記録、その分有のあり方を議論し続けてきた同研究会にとってもチャレンジングな実践の場となった。開催期間中は、家族連れや高校生など、約80名の方から感想をいただいた。2日目のトークイベント「被災した写真を見るということ」には、約50名の方が参加された。本研究会は、関心のあるなしにかかわらず、いかにして市民を巻き込み、災害文化の醸成に寄与するかということが課題の一つであるが、その一端を担えたのではないかと思う。</p> <p>(2) 独自性及び改善点 研究会として新たな実践を生み出すことができたが、メンバー全員が集まれる機会が少なく、研究会全体の意思決定が難しかったということがある。どのようにメンバーの関心を共有していくかが課題である。</p> <p>(3) 今後の活動予定 これまでの実践・研究を報告書、論文等の成果にすることを中心に進めていく。</p>
